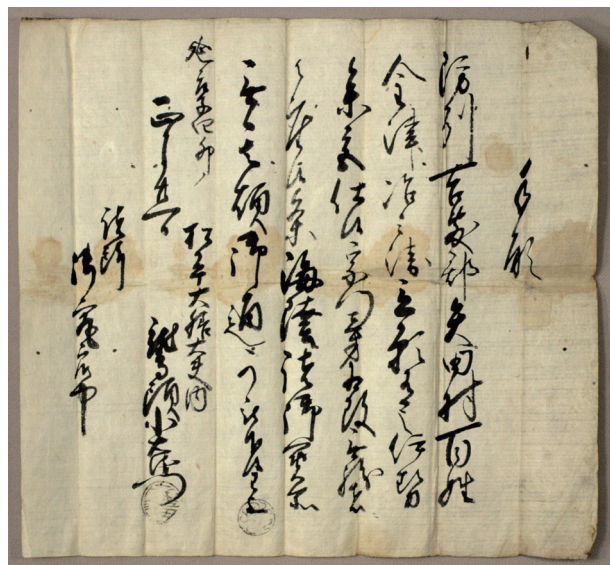


伊勢参りと往来手形



* 金津家文書400
「矢田村百姓金津治兵衛 伊勢参宮道中手形」

手形
防州吉敷郡矢田村百姓
金津治兵衛立願これあり、伊勢
参宮仕候、宗門旁（かたがた）あい改め、紛れなき者に
御座候条、海陸諸御関所
その類いなく御通し下さるべく候、已上
延享四卯ノ
松平大膳大夫内
正月廿一日
諸所
御究衆中
鷺頭小右衛門

解説

写真は1747（延享4）年、吉敷郡矢田村（現山口市）の金津治兵衛が伊勢参りをしたときの往来手形（通行手形）で、携帯に便利なように小さく折りたたんだあとが残っています。手形は山口代官鷺頭小右衛門の名で出され、旅先の役人（御究め衆）にあてて、この人物の身元が確かであることを証し、通行に支障のないように求めています。

戦国期、伊勢神宮は相次ぐ戦乱を受けて荒廃したことから、御師（おんし）たちが全国の旦那（信者・支援者）を回訪し、札や曆などを配りながら布教をすすめました。

江戸時代になると、伊勢参りは関所の廃止や街道の整備などで観光化し、「お蔭参り」ともよばれて、しばしば爆発的なブームになりました。百姓なども「講」を組んで旅費を捻出し、くじに当たった者が代参する風潮が広がりました。最新の知識や農具、品種改良された稲、芸能などが彼らによって村にもたらされました。

* 「玉木土佐守覚書」（毛利家文庫16叢書23、別名「身自鏡」）に、毛利の家臣玉木吉保の1581（天正9）年の伊勢参宮の記事があります。姫路で秀吉の鳥取出陣を見、京・安土・鈴鹿を經由して宿願であった伊勢に参っています。「上方は関も無、何の障（さわり）もなし」と述べています。